

## じいちゃんの麦わらぼうし

奄美市立朝日小学校 六年 濱田 琉陽

「大樹、行ったぞお。」

「オーライ、オーライ アウト。」

今日も海辺の公園はにぎやかだ。野球ぼうをかぶった少年たちの中に、麦わらぼうしが二つ。陽平と大樹だ。

「野球をやって遊ぶ人なら、野球ぼうのほうがよくな  
いか。」

と聞かれても、

「いいのいいの、これが最高。」

「なあ、すずしいし。」

二人の麦わらぼうしは、じいちゃんたちからのお下がりであった。陽平のじいちゃんは五年前に亡くなったけど、陽平はじいちゃんにもらった麦わらぼうしを、だいじにだいじに使っている。陽平と仲のよい大樹もじいちゃんにたのんで、麦わらぼうしをもらったってわけだ。二人の麦わらぼうしは、じいちゃんたちが子どものころからかぶっていたものだから、少しぼろつちいけど、いつもじいちゃんというみたいで、二人には大のお気に入りなのだ。

大樹と陽平には、二人しか知らない秘密基地があった。いつもの遊び場から少しはなれたところに、大きな大きなガジユマルが立っているのだ。

「ふう。ついた。」

「やつぱ休けいするなら、ここじゃなきゃな。」

この木の下はずすしい。二人がそこに行くときはきまつて木かげが出来ていて、マンガを読んだり、昼ねをしたりするのにちょうどいいのだ。それは、大樹と陽平にとつて最高の時間だった。

そんなある日、いつものようにガジユマルの下で休んでいると、

「おおい。」

どこからともなく声がした。二人いっしょにとび起きてふり返ると、まっ黒に日やけた一人の少年が立っていた。

「だれだお前。陽平、お前の友達。」

陽平も大樹も、全然知らない少年だった。

「ぼくもいっしょに遊ばせて。」

秘密基地にとつ然現れた不思議な少年におどろきな  
がらも、

「ぼくは陽平。」

「おれは大樹。」

「ぼくはケン。」

三人はすぐにうちとけて、仲よく遊び始めた。

その日から、そのガジュマルの木の下の行くと必ずケンがそこにいた。三人は、毎日毎日木の下で遊んだ。鬼ごっこをしたり、木のぼりをしたり、虫とりをしたり……。

そんなある日、ケンがとつ然こう言った。

「君たちを見ていると、前によく遊んでいた友達を思い出すよ。その友達も二人組でね、君たちみたいな麦わらぼうしをかぶっていたんだ。」

ケンは遠くを見るような目をしている。

「その友達とも、毎日毎日ここへ来て遊んでたなあ。」その日の帰り道、大樹が陽平に不思議そうな顔をして話しかけてきた。

「なあ陽平、おれたち以外にも麦わらぼうしをかぶっているやつがいるんだな。」

「少し前の友達って言ってたから、ぼくたちの知らないやつらだよ、きつと。」

「でも、このガジュマルを遊ぶ場所にしてたってことは、きつといいやつだな。」

「そうだよな。ぼくたちとも気が合いそうだな。」

「そうかもな。」

二人は笑いながら帰っていった。

次の日、三人で遊んでいると、陽平が突然大声でさ

けんだ。

「ない、ない、なあい。」

「何がだよ。」

「ぼくの麦わらぼうしだよ。たしかにさっきまでかぶってたんだ。風にとばされたのかなあ……。どうしよう。どうしよう。あの麦わらは、じいちゃんにもらったものなの……。」

もう陽平はパニックになって、涙目になっている。

「そんなに大切なぼうしなの。」

そうケンが聞くと、陽平の代わりに大樹が答えた。

「あの麦わらは、陽平の死んだじいちゃんからもらったものなんだ。陽平のじいちゃんとおれのじいちゃん、小さいころから仲がよくてずっと友達だったんだ。陽平もおれもじいちゃんの家にあった麦わらぼうしがどうしてもほしくて、じいちゃんたちにたのんでもらったんだ。」

「そうだったんだ。だったら、絶対に見つけなきゃ。」

ケンは、強い声でそう言った。

「でも、どこにあるんだろう。」

だんだん辺りが暗くなり、今日は探すのをあきらめて家に帰ることにした。

次の日、陽平と大樹が急いでガジュマルの木の下に

行くと、陽平の麦わらぼうしを持ってボロボロの服を着たケンが立っていたんだ。

「ケン、どうしたんだ、そのかつこう。」

陽平はびっくりして言った。

「これ、この木の一番上の枝にひっかかってたよ。登るの大変だったけどとっておいたから。」

ケンにはっこり笑って言った。

「お前一人でとったのか。この木十メートルはあるんだぜ。どうやって登ったんだよ。」

大樹は不思議そうな顔をしてケンに聞いたけど、ケンはただ、にこにこ笑っているだけだった。

その次の日から、ケンは秘密基地に現われなかった。一週間たち、二週間たってもケンの姿を見ることはなかった。

「なあ、陽平。ケンって人間だったのかなあ。」

「はあ。人間にきまつてるだろ。」

「でもさあ、何か不思議だと思わない。この木のてっぺんまで一人で登れるかねえ。」

「考えすぎだよ。どうにかすれば登れるんだよ。」

ケンと会えなくなっから一か月たったころ、陽平と大樹は、大樹のじいちゃんの家遊びに行った。じいちゃんにケンのことを話すと、

「ほう、それはきつとケンムンだな。」

じいちゃんは、なつかしそうに言った。

「ケンムン。」

「ケンムンというのはな、ガジュマルの木に住む奄美の妖怪さ。わしもお前からくらのころ、陽平君のじいさんと二人でいつもあの木の下で遊んでいたんだよ。もちろん、今お前たちがかぶっている麦わらをかぶってな。そしたらケンという少年が現れて、いろいろ遊んだもんじゃよ。」

「じゃあ、ケンの言ってた少し前の友達って、じいちゃんたちのこと。」

「たぶんそうじゃよ。」

大樹のじいちゃんは、うれしそうだ。

「ねえ、じいちゃん、おれたちまたケンに会えるのかな。」

大樹がじいちゃんにそう聞くと、

「正体がばれてしまったら、もうケンムンは出てこんよ。でも、陽平の麦わらぼうしをもどすことができてる、ケンムンもよろこんでるだろうよ。」

大樹と陽平はさびしいような、うれしいようなへんな気持ちのまま、帰り始めた。

「なあ、大樹。ぼくたち、もうケンには会えないのかな。」

「うん、そうかもなあ。でも、おれたちの子どもやま

「ごがいつかケンに会えるかもしれないぜ。」

「そうか、ケンムンはずっと生きてるんだからな。」

「ケンがまた現れることができるように、あのガジユマルの木、大切に守っていこうぜ。」

「そうだな、お前、いいこと言うねえ。」

古い二つの麦わらぼうしは、夕日に照らされ、金色に光って、笑っているみたいだった。

